

平成23年度
No. 4
11月30日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋1-22-14
電話 03-3501-9288
発行人 会長 露木 昌仙
編集人 広報部長 入野貴美子

「いのち」の大切さや喜び、その不思議さや重さを学び 自らの「いのち」を輝かせていくために

第63回全連小研究協議会山形大会成功裡に終わる

平成23年10月20日(木)～21日(金)山形県体育館及び周辺会場

北前船交易によって栄えた東西文化の交流の地、人と自然とが共生する文化を受け継ぐ地、また出羽三山や鳥海山に代表される祈りの文化に支えられた地である山形県において、10月20日(木)・21日(金)の2日間、第63回全国連合小学校長会研究協議会山形大会が全国から約3000名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新しい主題のもとでスタートして4年目、そして東日本大震災からの復興を期する大会となる。1日目は、開会式・全体会の後、13の分科会・分散会に分かれて活発な協議が行われた。2日目には「夢を実現する誇りと志、いのち輝く人生」を主題にしたシンポジウムが、あき竹城氏・根岸吉太郎氏・奥山清行氏をシンポジストに迎え、堀竹充調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では、「夜明けのうた」を合唱し、感動のうちに大会の幕を閉じた。

大会主題

新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～誇りと志を胸に、ともに夢に向かう、いのち輝く子どもを育てる学校経営～

開会式

- 1 開会のことば 砂川次郎 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 露木昌仙 大会会長
鈴木弘康 大会実行委員長
- 4 祝辞 文部科学大臣 中川正春様
(代読 文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様)
山形県知事 吉村美栄子様
山形県教育委員会教育長 相馬周一郎様
山形市長 市川昭男様
- 5 来賓紹介
- 6 閉式

被災地に支援・絆を深める大会に

露木昌仙 大会会長

全国から2959名の校長先生方を集め、第63回全国連合小学校長会研究協議会山形大会を開催したところ、文部科学省大臣官房審議官徳久治彦様、山形県知事吉村美栄子様をはじめ多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り盛大に開催できることに厚くお礼申し上げます。

3月11日の東日本大震災発生以来、東北連小の校長先生方には、学校の復旧のため子どもたちの教育のためにご尽力されてきた姿に敬意を表する。大会開催が危ぶまれる中、「このような時こそ全国の校長に東北に集まっていただき



たい。東北の姿を直接見て、また声を聴いていただくことに意義がある。」と、改めてこの大会の開催を決断されたと伺っている。全国の校長は、東北の山形の校長先生方のこの凜とした姿に大いに応えていきたいと思う。これまで全連小、また各都道府県の校長会としても直接・間接に義援金等を通して東北を支援してきた。1学期末までに全国からいただいた義援金が4253万円に達している。このような中、青森県の校長会からは、「全連小の支援は重大被災の県に重点化してください。」というお声を頂戴した。茨城県・千葉県からも同様のご意見を頂戴した。「全連小として息の長い支援を」という話を年度初めにさせていただいたが、今後は岩手県・宮城県・福島県の重大被災3県に私どもの支援を重点化していきたい。そこで、2学期末と3学期末を目途に、全国2851名の会員の一人3000円ずつ、合計6000円の支援（総計1億2000万円）を今年度内に行いたいと考えている。是非、ご協力を賜りたい。都道府県の状況は様々かと思うが、できる形での支援をお願いしたい。

さて、4月より新しい学習指導要領の全面实施、また国による「小学校1年生における35人以下学級」が進められている。このような中、平成24年度の文部科学省の概算要求では、「小学校2年生における35人以下学級」の実現に向けた要求が出されたところである。今は文部科学省の概算要求の段階であり、財務省を経て国会の議決も通さなければならない。一番力になるのが、日本国民の総意である。全連小は関係23団体とともに、11月に少人数学級を進めるための全国集会を開催させていただき、国民全てが「小学校2年生における35人以下学級」を望んでいるということを財務省・各会派に強く訴えていこうと考えている。

結びに、本大会を開催するに当たり3年有余ご苦勞を重ねてきた鈴木弘康会長をはじめとする山形県の校長先生方、また東北連小の校長先

生方に改めて敬意を表する。そして本大会が被災された地域に大きなエールを送り支援の絆を広げる大会になることを祈念し、開会のあいさつとさせていただきます。

立ち位置確かに、足場を強く

鈴木弘康 大会実行委員長

「立ち位置確かに、足場を強く」を合言葉に、経営力を高め信頼を得られる学校と実践を目指し、そして東日本大震災の復興を期す全国連合小学校長会山形大会が多くのご来賓の皆様をお迎えし、ここに開会できることを本当に嬉しく思う。

私たちが生きるために夢や希望をもつことは、大切なことである。もともと夢や希望は、未来に向かって自由に描けるものであった。それがバブルの崩壊・リーマンショック、そしてグローバル化が進み、少し描きにくい世の中になっている。そしてあの大地震が起き、何もかも失った時、人は生きる糸口を根源的なものに見つけようとした。「自分とは何か、自分にとって大切なこと、自分の出来ること、自分が目指すべきこと」それらを暗闇の中で探した。そして私たちは、見付けたもの全てが希望と希望の種となることを学んだ。学校には、思いや憧れというものが必要である。伝統や校風を引き継ぐ自分の立ち位置が見える学校である。下級生みんなが憧れる6年生がいて、若い教師の目指す先輩教師がいるということである。私たちは、道場のような職場で教師魂を叩き込まれてきた。今、その魂を若い世代に伝えることができているだろうか。「誇りと志」に代えて「過去と未来をつなぐ時間軸」、第五次山形県教育振興計画は、これを「命の縦糸」と呼んでいる。そして、学校は仲間とともに育つ場である。もっと子ども同士が、教師同士が向き合える学校でありたいものである。「ともに夢に向かう空間軸」、これを「命の横糸」と呼んでいる。希望の種は、この二つの糸の接点に蒔き、そこに芽吹くものであると思う。

山形大会は、これまでの大会に学ばせていただき、特に分科会の充実については、その多くを北海道大会の成果を継承した。会場の利便性等、全てにおいて地方の小都市のハンデは否めない。そこは、私たちが温かな対応と丁寧な情報提供をモットーに山形県連小304人が努力させていただく。活発な情報交換による討議の輪が広がることを祈念し、あいさつとする。

中川文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様

はじめに3月11日に発生した東日本大震災によって、お亡くなりになられた方々に心から哀悼の意を表するとともに、ご遺族と被害に遭われた方々への心からのお見舞いを申し上げます。

第63回全国連合小学校長会研究協議会山形大会が多数のご参加のもと、盛大に開催されることを心よりお祝い申し上げます。ご出席の校長先生方には、被災地からの転入児童の受け入れや教職員の派遣、物的支援など様々な形で被災地支援にご尽力いただき、深く敬意を表するとともに心より感謝申し上げます。

新学習指導要領のもとで学んでいく子どもたちは、将来社会の中心として活躍していく存在である。そのためにも、新学習指導要領のねらいである生きる力の育成の理念を実現することが重要と考える。

さて、この度の平成24年度文部科学省概算要求・要望においては、我が国の経済社会を再生し、国民一人一人が希望をもって前に進める社会を実現するため、東日本大震災を乗り越えて復興を実現するために必要な経費を要求したところである。皆様からのご支援ご協力を得ながら、今後の政府としての予算編成等にしっかりと取り組んでいきたい。

結びに、今大会が所期の目的を達成するとともに全国連合小学校長会のますますのご発展と、ご出席の皆様のご活躍を祈念し、お祝いの言葉とする。

山形県知事祝辞（要旨）

山形県知事 吉村美栄子様

本大会が山形県で盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げます。校長先生方には、学校教育の充実・発展にご尽力いただき、深く敬意を表する。

本県では、震災直後からできる限りの支援を行っている。今後も被災された方々へ、できる最大限の支援を行っていききたい。本県では「第三次山形県総合発展計画」を策定し、この柱の一つに「教育・人づくりの充実」を掲げ、教育については暮らしや産業を支える基盤となる重要なものとして、力を入れている。「教育山形さんさんプラン」は、全国に先駆けて平成14年度より実施している少人数学級編制の取組である。今年度で義務教育課程全てにおいて完全実

施されており、国においても同様の広がりを見せていることは、誠に喜ばしいと思う。また、本県では「いのちの教育」を大きな柱に掲げている。未曾有の大震災を受け、改めて「いのちの大切さ」「人と人との絆の大切さ」を噛みしめている。次代を担う子どもたちには、希望をもってこの苦境を乗り越え、人生を切り拓くたくましい人間に育ってくれることを願っている。

結びに、本大会のご成功と全連小のますますのご発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉とする。

山形県教育委員会教育長祝辞（要旨）

教育長 相馬周一郎様

本大会が、ここ山形県で盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。東日本大震災では、多くの尊い命が奪われ、その中に多くの児童生徒が含まれている。本日は、被災県の校長先生方も多数ご出席と思うが、胸中ご推察申し上げます。本県でも大震災の影響は多方面に及んだが、子どもたちの屈託のない笑顔や澄んだ瞳に救われ、教職員も元気を取り戻している。1500名を超える被災児童生徒を受け入れ、心のケアを含めきめ細やかな教育活動を展開している。本県では、昨年度「第五次山形県教育振興計画」の見直しで、後期計画を定めた。この計画では、「変化する時代を主体的に生きぬく力を育む『いのちの教育』」を重点施策に掲げている。この「主体的に生きぬく力」の育成がこの度の震災を乗り越える上で重要であることは明らかである。子どもたちには、この逆境の中にあっても、論語にある「恕」の心（相手を思いやる心）をもって、心豊かにたくましく育てほしいと願っている。全国の小学校の校長先生方が一堂に会して、今日的教育課題を踏まえ、研究・協議を深め協力体制を強めることは大変意義深く、その成果に大きな期待を寄せている。

山形市長祝辞（要旨）

山形市長 市川昭男様

全国より多くの皆様をお迎えし、山形市を会場に本大会が開催されることは喜ばしく、山形市民と共に心から歓迎申し上げます。

小学校では、今年度より新学習指導要領が全面実施となった。これまでの学習指導要領は、ゆとりの中で「生きる力」を育むという点で成果を上げたが、子どもたちの学習状況にはいくつかの課題も指摘された。これらの課題解決の

ために、今回の改訂で知識や技能、思考力や判断力、表現力を高めるために授業時数が増えたこと、外国語を用いて積極的なコミュニケーションができるように外国語活動が設けられたことが挙げられる。本市においても新学習指導要領に対応するため、校長会がリードして新しい教育課程の編成に取り組んでいる。新しいものを生み出すために、それぞれの学校が試行錯誤を繰り返し、成果や新たな課題を発見しているところである。このような中、「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のテーマのもと、全国の小学校の校長先生方が一堂に会し、本大会が開催されることは、誠に意義深いことである。分科会を中心とした話し合いを通して、小学校教育の充実・発展のため、実りある成果を上げられるようご期待申し上げます。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様

現在は、概算要求の時期であり、「小学校2年生における35人以下学級」の実現への概算要求をしたところである。また、東日本大震災では、2学期になっても2万5千余名の転校が余儀なくされている。全国の学校においては、適切な受け入れ、人的・物的支援をいただいていることに感謝申し上げます。文科省でも大震災に関する就学支援・スクールカウンセラー・施設の復旧と耐震化への予算措置に尽力していく。

文科省の行政説明についてお話す。第一は、文科省のホームページ「東日本大震災子どもの学びポータルサイト」の開設についてである。被災児童・生徒が必要な支援を受けやすくするために支援がほしい団体と支援の提供ができる団体が相互に連絡（書き込み）できるようにしている。開設以来、実際に支援が行われたケースは、1200件を超えている。

第二は、平成24年度文科省概算要求・要望のポイントについてである。この基本方針は、我が国経済社会の再生、国民が希望をもって前に進める社会を実現するための未来への先行投資としての要望である。また、学校施設の復旧・耐震化や原子力災害からの復興支援など、国家的危機の東日本大震災を乗り越えるために必要な復旧・復興対策に係る経費の要求である。初等中等教育の充実では、「小学校2年生における35人以下学級」の実現、学習支援が必要な児童生徒への支援等での教職員配置の充実（7000

人の教職員定数改善）、全国学力・学習状況調査の実施（平成24年度は、理科を追加し、抽出及び希望利用方式、25年度は、悉皆調査を視野に入れ「きめ細かい調査」を実施）等を要求している。予算の実現には、財務省、政府・国会を経ること、35人以下学級では法律改正も必要である。そのためには、国民の理解が必要であり、ご協力をお願い申し上げます。

第三は、初等中等教育の方向となる第2期教育振興基本計画の策定についてである。現行の教育振興計画（平成20年7月閣議決定）から3年が経過し、平成25年度からの第2期教育振興基本計画の策定に関する審議を行っている。全連小の代表にも参加いただき教育現場の声を反映した骨太の計画にしたい。

第四は、新学習指導要領の円滑な実施に向けた支援策についてである。平成23年度予算額では、「小学校1年生における35人以下学級」の制度化・理科教育等設備整備費補助・教科書の充実（教科書の無償給与）・外国語教育の推進（英語ノート）等で支援している。各地では、順調に新学習指導要領による教育課程が実施されていると評価するとともに、先生方のご尽力に厚くお礼を申し上げます。今回は、教育内容に伴い教科書のページが増えるという改訂がなされた。今までの「教科書を教える教育観」から「教科書で教える教育観」への一層の転換が必要である。軽重に配慮した指導と指導内容に遺漏がないようお願いしたい。

最後に、4月からの「小学校1年生における35人以下学級」の実現は、皆様からのお力添えが大きい。全国一律で国の基準として実現できたことは、画期的なことである。このことが、2年生以上での実現への足跡を残したことになる。全連小の調査（6月）によると、担任によるきめ細かい指導の実現・学習意欲の向上・授業の活性化や個別指導の充実等の効果が挙げられている。このことによって、文科省が2年生での実現に向け、手を挙げることができた。今後も、財政当局・国会に学校と保護者の声を届けていただき、国民の声で予算が実現できるようにしてほしい。平成25年度以降は、「小学校3年生における35人以下学級」の実現にお力添えをお願いしたい。また、平成23年度は東日本大震災の影響等により、全国学力・学習状況調査を見送った。数年に一度はきめ細かい調査を実施する必要があるとの専門家会議の提言から、平成25年度は、悉皆調査を実施することを視野に入れ、年度末までに検討していく。

第1日 全体会

司会 阿部敬行 大会実行副委員長

- 1 本部報告
- 2 大会主題・研究課題趣旨説明
- 3 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

小澤良一 対策部長

要望活動、各部の活動概要などについて5項目に分けて報告する。

1点目、「平成24年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書」について、文部科学省・財務省・総務省の関係各課を訪問し、要望書を手渡し要望活動を行った。文部科学省では、小学校長会として文教施策を後押しする声を大きく上げてほしいと期待された。

2点目は、「東日本大震災復興に関わる学校教育への支援要望」についてである。会長と震災対策特別委員会委員等で、宮城県・岩手県・福島県の被災県を視察訪問した。各県の状況を取りまとめ、「教職員等の被災県を中心にした加配継続」等7項目にわたって、文部科学省、財務省、総務省の各大臣に会長が要望した。

3点目、「公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化」について、「第2学年以降においても学級編制の標準を35人以下に引き下げること」「学級を分割せず学級担任をサポートするT T教員等としての活用も可能とすること」など5項目にわたる意見書を、文科省初等中等教育局長に会長より提出した。

4点目、三地区対策・調査研究担当者連絡協議会を、9月27日東京、10月6日福岡、10月7日大阪で開催した。各都道府県の担当の皆様方

から各県の状況等についての発表、意見等をいただいた。

5点目に対策部、調査研究部、広報部の各委員会の活動について、対策部には4つの委員会、調査研究部には6つの委員会、広報部には4つの委員会があり、活動計画や内容については、全連小速報第2号に詳しく紹介されているので、参照願いたい。

大会主題・研究課題趣旨説明

齋藤昭恵 山形大会研究部長

山形の風土は数多くの文学者の豊かな感性を育んできた。私たちは幼い頃から、いつまでも輝きを失わない郷土の偉人たちと彼らを輩出した風土や文化を誇りに思い、自らの志を立てて生きてきた。

本大会は大会主題の理念をさらに推し進めることを目指し、副主題を「誇りと志を胸に、ともに夢に向かう、いのち輝く子どもを育てる学校経営」と設定し、大会のスローガンを「立ち位置確かに、足場を強く」とした。

先行き不透明な時代においては、特に重視すべきは、子どもの「立ち位置」を確かにしていくことである。60年ぶりに改正された教育基本法を始めとする教育三法はこれまでの教育の営みの中で、守るべき価値ある不易の部分と積極的に変えるべき流行の部分を見極めていく重要性を示唆している。子どもの「立ち位置」を確かにすることは、校長自らが「不易と流行」「過去と未来」の視点から、経営ビジョンを描くことと重なる。その中でこそ、子どもは誇りと志を胸に抱き、仲間と共に夢に向かうことの大切さを学ぶことができる。

本大会が、これまでに成果を上げた実践のよさを確認し合い、交流を通じて確かな経営理念を共有し合うとともに、新たな発想や視点を得られる協議会となることを期待している。

<分科会・研究課題と研究の視点>

1 「校長の職責」

課題：創意と活力に満ちた学校づくり

視点①：子どもの夢や希望の実現に向かう、創意に満ちた学校経営の推進



視点②：明確なビジョンを掲げた、活力に満ちた学校経営の推進

2 「組織・運営」

課題：組織の力が生きる運営を目指す学校づくり

視点①：子どもと向き合う時間を生み出す校内運営組織の改善

視点②：今日的な諸課題への学校としての対応力の強化

3 「学校評価・人事評価」

課題：学校評価・人事評価を生かした学校づくり

視点①：学校評価を生かした開かれた学校づくりの推進

視点②：人事評価を生かした信頼される学校づくりの推進

4 「教育課程Ⅰ 心の教育」

課題：豊かな心を育む学校づくり

視点①：倫理観や規範意識等を育む教育課程の編成

視点②：他と調和しながら共に生きる喜びを育む教育課程の編成

「教育課程Ⅱ 確かな学力」

課題：確かな学力の向上を目指す学校づくり

視点①：「確かな学力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

視点②：「確かな学力」を育む学習評価の在り方と確立

5 「現職教育」

課題：教職員の資質・能力を高める学校づくり

視点①：教師の実践的指導力を高める校内研修体制の充実

視点②：教職員に専門職としての自信と誇りを育む指導・助言の在り方

6 「生徒指導」

課題：豊かな人間関係を築く学校づくり

視点①：児童理解を深め、関わり合う力の育成を目指す生徒指導の推進

視点②：家庭・地域・関係機関等との連携を生かした生徒指導の推進

7 「人権教育」

課題：互いに尊重し合う心を育む学校づくり

視点①：生命を尊重し、自立と共生の心を育む教育の推進

視点②：他人への敬意と共感的理解を育む教育の推進

8 「健康教育」

課題：健やかでたくましい心と体を育む学校づくり

視点①：心身ともに健やかな成長を目指す健康教育の推進

視点②：「生きる力」の基盤としての生活習慣の確立を目指す食育の推進

9 「環境教育」

課題：豊かな感性と実践力を育む学校づくり

視点①：教科・領域等との関連を通して学ぶ環境教育の推進

視点②：体験を通して実践的な態度を育む環境教育の推進

10 「家庭・地域・異校種等との連携」

課題：家庭・地域・異校種との連携を生かした学校づくり

視点①：学校と家庭・地域等との相互理解を深める連携の推進

視点②：幼保・中学校との連携を生かした教育活動の推進

特別分科会「教育課題Ⅰ」

課題：情報教育・外国語活動

視点①：情報活用能力や情報モラルを高める教育活動の推進

視点②：外国語活動を支える環境づくりと条件整備の推進

特別分科会「教育課題Ⅱ」

課題：キャリア教育・特別支援教育

課題①：自立を促し、社会の一員としての資質を育む特別支援教育の推進

課題②：豊かな体験の中で、自分の生き方を見つめるキャリア教育の推進



第2日 全体会

司会 丹野学 大会実行副委員長

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

白鳥樹一郎 大会宣言文起草委員長

◇ シンポジウム

研究協議のまとめ

斎藤昭憲 山形大会研究部長

昨日開催した13の分科会・分散会では、発表者の周到的な準備による充実した発表の数々、熱のこもった途切れることのないグループ協議、まさに参会者全員でつくりあげていただいた。協議のまとめとして、2点報告する。

1 新教育課程実施初年度の課題に関わる協議内容について

- (1) 新学習指導要領実施による授業時数と学習内容の量的な拡大に伴う子どもと向き合う時間の確保について、第2分科会の研究の視点①で討議された。その具体的な方法として、校長の考えを丁寧に伝えて行う外部人材の活用の有効性などについて議論されたが、それを実施するためには、職員組織の活性化が必要であり、それを生み出す校長の指導性とリーダーシップが大切であると再確認された。
- (2) 第5分科会現職教育では、若手教師の育成が論議された。よい手本を見せて学ばせること、また、いくつかの学校と連携して研修計画を作成し実施することが有効である等の意見が交わされた。
- (3) 確かな学力の育成について第4分科会第2分散会で論議された。確かな学力を根底から支える人づくりとしての健康な体や規範意識の大切さ、学びを生かすために活用のための足場のある授業を行うことなどの提案があり、参会者からは教科担任制による取組の有効性や自分の思いを素直に問いとして発することができる児童の育成などの意見が交わされた。
- (4) 今日の課題であるICT、外国語活動、特別支援教育、キャリア教育などの分科会・分散会では、教師の意識改革を校長としていかに

進めていくか、取り組みやすい支援体制や環境整備をいかに図るかなどについて協議がなされた。校長自身が情報を的確に収集するアンテナの高さを持ち、企画を構想していく確かな足場をもつことの必要性も論議された。

2 分科会運営の充実における成果と課題について

(1) 成果

- ① 発表内容の充実について・・・成果として事例研究にとどまらず、校長の経営理念や指導性を強調した発表が確実に増えていることが評価された。
- ② 運営面での成果について・・・グループ協議の導入は協議会の活性化に効果的であったこと。二つ目には、実物投影機などによる協議の視覚化、映像化も大変有効であったこと。三つ目には、アナライズカードによる参加者の考えの表明も協議の活性化に役立ったこと。四つ目には、研究の視点や発表の要旨、協議のポイントを簡潔にまとめた配付資料を心づくしとしてすべての分科会で提供したが、理解に役立ち協議にスムーズに入ることができたと評価をいただいた。また、全国各地の会員と幅広い交流が生まれる座席表も好評であった。

(2) 課題

- ① 大会副主題と分科会の研究の視点をより具体化した発表内容の充実に向け、主催者と発表者の双方向の努力が必要であること
- ② 分科会協議の目的について、「発表内容の協議」（深まり）と「参加者の意見交流」（広がり）という二つの視点から、バランスのよい協議の組立を工夫すること
- ③ 「一校の発表」か「市町村校長会の発表」かの課題については、今回の発表で共同研究の有効性が報告されたことをもとに検討していくこと

山形県校長会は、「北海道大会の提案と充実した成果に小さな心づくしを加えて」を合言葉として運営してきたが、心づくしの思いを少しでも汲んでいただければ幸いである。来年の奈良大会において更に充実した研究協議がなされることを期待して、協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果をあげてきた。

本大会では、4年目となる大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を掲げ、これまでの三大会の成果を引き継ぎ、その研究に組織をあげて取り組んできた。

今、我が国は、東日本大震災からの復興という未曾有の課題に立ち向かっている。このような状況において、学校教育の責務は、未来の担い手たる子どもたちを育てるべく、本年度より全面実施された学習指導要領のもと、確かな学力や豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことにある。

加えて、子どもたちが、未来に夢をもち、たくましく生きていくためには、その「立ち位置」を確かにしていくことが重要である。過去と未来を結ぶ「いのちの縦糸」と、共に生きる者同士を結ぶ「いのちの横糸」の接点に、しっかりとした足場を築くことである。そのためには、校長自らが、不易と流行、過去と未来、自己と他者の視点に立って志を高く掲げ、子どもたちが誇りとするのできる学校を築いていく必要がある。

私たち校長は、被災した学校や子どもたちを支え続けるとともに、歴史的な岐路に立つ今こそ、確固たる信念を打ち立て、山形大会における副主題「誇りと志を胸に、ともに夢に向かう、いのち輝く子どもを育てる学校経営」に全力を傾注し、国民の信託に応えなければならない。

ここに第63回、全国連合小学校長会研究協議会山形大会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

- 一、大震災を乗り越え、未来に生きる子どもたちの明日を切り拓く力を育む教育の創出と教育諸条件の整備・充実
- 一、誇りと志を胸に、ともに夢に向かう、いのち輝く子どもの育成
- 一、未来志向に立ち、確固たる経営方針に基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進
- 一、「生きる力」を育む創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核に据えた心の教育の一層の充実
- 一、学校の自主性・自律性の確立と、家庭や地域社会との相互理解に基づく教育活動の充実
- 一、安全で安心できる教育環境づくりと子どもの居場所づくりの推進
- 一、校長自らの研鑽と現職教育の充実に基づく組織力の向上

右、宣言する。

平成23年10月21日

第63回全国連合小学校長会研究協議会山形大会

シンポジウム

『夢を実現する誇りと志、いのち輝く人生』

(要旨)

シンポジスト

女優 あき竹城氏
映画監督・東北芸術工科大学学長
根岸吉太郎氏
工業デザイナー・KEN OKUYAMA DESIGN 代表
奥山清行氏

コーディネーター

全連小調査研究部長 堀竹 充



堀竹 まず、皆様がこれまでどんなお仕事をされてきたかということを中心に、私の生き方というテーマでお話をいただきたい。続いて、我が心のバックボーン、今のご自分を支えているもの、成功のもととなっているものについて、最後に、大切にしている心情や明日を担う子どもたちへの期待などについてそれぞれのお考えをお話しいただきたい。

奥山 今まで海外で30年ほど生活をしてきて、車とか街づくりなどのデザインの仕事をしてきた。



4年ほど前に日本に戻り、山形を拠点として日本中の色々な地方文化を世界に発信していこうということで会社を立ち上げた。日本の地方の伝統技術が食材だとすると、私たちデザイナーは、それ

を使った料理（デザイン）を世界に発信していく調理人であると考えている。

ここに絵がある。（エンツォフェラーリのイラストがスクリーンに映し出される）プロジェクトを作って、2年間を費やしてきたカーデザインのプレゼンの日のことである。フェラーリの会長がやって来て、デザインをひと目みるなり、「これは、だめだ。」と言って帰ろうとした。その時私の上司は、会長を15分間とどめておいて、「オクヤマ、15分やるから採用される絵を描いて来い。」と特命を下した。いくら私でも15分で絵は描けない。この絵は、万が一、プロジェクトがうまくいかなかった時のために私が準備をしていた絵である。上司はなぜかそのことを知っていた。人生に一度来るか来ないかわからない“15分”のために、この絵を準備していたからこそ、私はこの場に立つことができ、今カーデザイナーとして世界で仕事をしている。多分来ないであろう“15分”のために生涯準備をしているのがプロであるならば、その“15分”を準備していないがために、チャンスを逃してしまうのがアマチュアである。プロとアマチュアの違いはその“15分”をどう使うかによると考えている。

根岸 私にとっての3人の先生の話をしたい。

小学校6年の時、美術を教えてくれていた先生から、将来について聞かれた。劇場を経営していたので、「家業を継ぐ。」と答えたら、「保守的なことを言うんだね。もっとやりたいことないの。」と言われた。その時、急に自分が開放され、目が覚めたような気持ちになったことを思い出す。自分が映画監督になる希望をもてたスタートはその一言にあった。その一言によって、その先生は今でも私にとっての先生である。



映画界に入って出会った先生は、大学卒業後に助監督として付いた藤田敏八監督である。非常にだらしない人で、ある意味反面教師のような人だった。しかし、なぜ藤田監督についていったのかと思うと、その時代を切り拓く明確なビジョンをもっていたこと、それが彼の魅力でもあり、作品の魅力でもあったということである。藤田監督が何もしなくても、そこにいるという存在感によって、私は自分から演出するということを学び、またスタッフからも学んだと思う。

もう一つ、山形に来て、蔵王の山々に背後から見守られ、正面に出羽三山から連なる山々を見て、ここは自分を包んでくれる場所だと感じている。3月11日の震災の後に、自然に抱かれた自分を見直しながら生きていきたいなと思っているので、自分の中のもう一人の先生は、この山形の自然なのだと思う。

あき 私は小さい時から「宝塚歌劇団に入って、絶対ダンサーになりたい」と思っていた。中学を卒業したが、そんなに簡単に宝塚に入れるわけがなく、すぐに断念した。その後、手品師の内弟子を経て、日劇ミュージックに入った。



そこでも、いい役がつくこともなく、ダンサーとして地方回りをした。全国、たった一人でトラックを持って回り、とても怖い思いもした。でも、そんな時に、「こんなことでは負けてられないぞ」「今に見てろ。もっと上に行ってやる」といつもノートに書いていた。その後日劇に戻り、訛りを生かしてコントをやったところ、それが受けて舞台の仕事をいただくようになった。

今では、「テレビによく出てますね。」と言われるが、せっかく頑張ったこの世界に入ったのだから、「やらなきゃ」「もっと上に行きたい」という気持ちが常にある。役をいただいたら、「やるなら徹底的にやろう」「バラエティでも徹底して皆さんを喜ばせてやろう」という気持ちでいつもいる。

また、今の私を支えてくれているのはテレビを見てくれている方だが、やはり最初に私に大きなチャンスをくださったのは今村昌平監督である。映画「楢山節考」出演の話があったとき、監督から言われたことは「この映画では、台詞は訛りでなく、標準語で。」ということだった。それから3か月間、標準語の稽古をしたが、訛りはなかなか取れず、なかなか監督からOKが出ない。ようやくOKが出たときには泣いてしまった。監督には、「お前には、名脇役になってもらう。」と言われ、色々なことを教わった。奥山 会社で若い社員に、また学校で教える際によく言っているが、「若いうちは質より量だ」ということである。私は、今でも会社で一番多く絵を描いている。頭と手は不思議な関係があって、手を使い絵を描いているうちに、新しいアイデアが浮かんでくる。手とか、文章とか、チームであるとか、よりクリエイティブなところに自分を導いてくれる道具を見つけた人間は強いのだと思う。量をこなして、身体を動かしてものを考えようというのが、私の一つのバックボーンである。

根岸 映画の現場では、すべての人間が監督の「OK」という声を待っているということである。OKを出さない時というのは、その時に私が、「何かが違う」と思うときであって、大抵はそのことがもう一回やるという大きな原因である。私は、その何かが違うということをスタ

ッフや俳優に投げかけて、「こういうことがあるのでは」という提案をしてもらいたいと思っている。それぞれの好きなこと（考え）にずれがあるから、もう一回それを埋めようという努力をみんなにもしてもらいたい。自分が好きなことに責任をもつということが、最終的にスクリーンを見ている人たちに責任をもつことにつながっている。自分が支えているというよりも、支えてくれる人がいるから映画はできるのだといつも思っている。

また、子どもというのは私たちが思う以上にリアルな大人の目をもっている。私は、子どもに対してはできるだけ対等に、正直につき合っていく以外にないと考えている。私の大学の学生たちがボランティアで、被災地の子どもたちと接しているが、リアルな目をもった子どもたちに対して、今私たちに何ができるか、そして一緒にできることを長い時間かけて探していきたい。同時に、彼らの声に静かに耳を傾けることが一番大事なのではないかと考えている。

あき 私は子どもとの接触があまりないので、よくわからないのだが、亡くなった母に言われた「強く生きろよ。」という言葉をいつも思い出す。だから、震災に遭われた子どもたちに対しては「夢と希望をもって強く生きてほしい。生きていれば、絶対何かいいことがある。」と言いたい。

奥山 ケネディ大統領が、1962年に「人類を月に」という有名なスピーチをした。その7年後、演説を聞いた大卒の技術者が、実際に人類を月に送った。運命だと思うのは、その月面着陸に影響を受けたデザイナーが大阪万博に車を出し、私が見てカーデザイナーになりたいと思ったことである。誰かが夢を語り始めると、連鎖反応でつながっていく。そのきっかけをつくるのは、私たち大人の役目だと思う。

閉 会 式

- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 開 式 | |
| 2 | あいさつ | 露木昌仙 大会会長
久能和夫 大会実行副委員長
恒岡宗司 次期開催県代表 |
| 3 | 閉会のことば | 加藤博之 大会副会長 |

第209回 理 事 会

10月19日（水）午後1時45分開会

ホテルメトロポリタン山形

進行 入野 広報部長

1 開会のことば 砂川 副会長

2 会長あいさつ（要旨） 露木 会長

5月の東京での第208回理事会以来5ヵ月が経過した。この間、各地区の研究大会に参加し、各地区において素晴らしい研究大会を進めていることを感じた。地区によっては、1日開催、2日開催があり、また平日開催や金・土曜日開催、夏季休業中に開催するところもある。各地区の開催の在り方について、改めて勉強させていただいた。地区大会の発表、三地区対策・調研担当者連絡協議会での提案により、全国から情報提供をいただくと、様々な教育環境・特色ある教育に違いがあるということ強く感じた。

さて、本日は山形県の第209回理事会、明日より今年度の全国大会が開催される。3月11日のことを考えると今年度の山形県開催を心配された校長もいたことと思う。東北の校長が力を合わせ、明日からの全国大会の準備を進めてきたことを伝えていきたい。この間、4月は宮城県、8月には岩手県・福島県の校長会を訪問し、被災や復興の状況を伺う機会を設けた。岩手県では、被災地区や学校の状況に応じた支援の取組が行われている。福島県では、原発事故の影響で今でも学校が再開できないという困難な状況がある。800名近い教員が兼務発令で勤務していることは、厳しい状況であると感じる。全連小として各都道府県に義援金のお願いをし、全連小を通してあるいは直接約4200万円を各県にお届けした。「使いやすい。」「ありがたい。」というお礼の言葉をいただいている。ここで、改めて全国の理事に感謝申し上げる。その中で、徐々に状況の変化も出てきている。青森・茨城・千葉県では「義援金はありがたいが、今後は自分たちの県で何とかやっていくので、義援金は他県に」という申し出がある。今後、全連小では息の長い支援を岩手・宮城・福島県の3県に対して重点的に続けていきたい。

また、2学期末・3学期末に一人3000円、計6000円を目途に各都道府県で集め、全連小を通

して3県に届けていきたい。金額も含め各都道府県で取り組みやすい方法で息の長い支援を、是非お願い申し上げる。原発事故で子どもたちが県外移転をしている福島県は、厳しい状況である。来年度についても継続支援をお願いする。

本大会は、「東北・日本は一つ。絆で結ぶ。」を合言葉にしている。この間に行った、三地区対策・調研担当者連絡協議会では、人的支援を強く要望していくことを確認した。理科支援員・図書館司書・ALT等については、地教委単位で全く異なる状況にある。本大会の文部科学省行政説明資料にもあるように、定数改善については「小学校2年生における35人以下学級」の実現を平成24年度文科省概算要求のトップに入れることができた。35人以下学級が実現しても、加配定数が削減されないようにしたい。教職員定数は、小2・3・4・5・6年という基準で何人とし、都道府県教委が配当された教職員数を校長会と連携して活用できるように要望していく。「小学校2年生における35人以下学級」で4100人を、また4月からも教職として復興に携われるように東北の復興加配も要望していく。

今後に向けてであるが、全国大会参加の交通機関の手続きについては、校長会を通して申し込むよう伝えていただきたい。現況では、インターネット等を通して個人で申し込む会員が増え、校長会を通しての申し込みは5割に満たない状況である。そのため今回は、予約が取れず全体会に数十人が遅れるという見通しである。事務局への問い合わせ等があり、対応にご苦労されているとのことである。校長会として真摯に研修し、相手にも迷惑をかけないことも大切なことであり、校長としての連携にも通じると考える。今後の奈良大会・三重大会の折には、ご理解とご協力をお願いする。

最後に、本理事会と全国大会が成功裡に終わるようお願いする。

3 報告 司会 加藤 副会長

(1) 会務・事業・活動の概要 露木 会長

- (2) 会計 坂野 会計部長
・基金管理状況 負担金納入状況
- (3) 研究大会について
・山形大会について 鈴木 山形県会長
・奈良大会について 恒岡 奈良県会長
開催日：平成24年10月25日(木)・26日(金)
副主題：「ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもを育てる学校経営」
- (4) 要望活動について 小澤 対策部長
・平成24年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する9項目の要望事項
・東日本大震災に関わる小学校教育復旧支援の要望
・「公立義務教育諸学校の学校規模及び教員配置の適正化」についての意見
・「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について(審議経過報告)」に対する意見
- (5) 東日本大震災に関わる現況について
久能 宮城県会長
校舎の使用不可の学校数、児童・教職員の死者及び行方不明者数、宮城県の被害総額、震災加配定数の状況、放射線量等の測定の状況、復興への行政の取組、事業主や行政への管理責任を問うケース等についての状況説明。
- (6) その他
・海外教育事情視察報告 蔵本 視察団長
・日韓教育文化交流報告 堀竹 調研部長

4 議事 司会 加藤 副会長

- (1) 被災地3県における負担金の取り扱いについて(提案) 露木 会長
・本年度負担金については、免除。(承認)

5 情報交換(防災計画・備蓄状況等について)

東京都の「A小学校の避難訓練年間計画」を基に、大地震(津波発生)や火災発生時の避難訓練事例を紹介した後、各地域の情報交換を行った。

岩手 盛岡は、地震による建物の倒壊や津波の被害はほとんどなかった。しかし、停電によって連絡方法が途絶えたため、学区内の掲示板を

活用して状況を知らせた。4月7日に地震が発生した際にも停電があり、信号機が作動しないという状況があった。このような状況下と教職員数では、安全な集団下校対応がとれないため、引き取り対応にした。その際の適切な連絡方法がないことが課題である。

宮崎 九州地区の近隣3県では、学校の食料備蓄がない状況である。宮崎市では、学校の寝具・食料備蓄の調査があったが、現状では備蓄はなく予算確保も難しい。鹿児島市では、停電の際の情報確保に向け、携帯ラジオを購入する動きがある。

富山 富山県では、最近地震の被害がないため、危機意識を高めていくことが課題である。高岡市では、津波の際に海岸から5km、標高8mの地点でも海岸からの逆流によって水位が2mに達する可能性がある。これを想定し屋上への避難訓練を行った際、3月11日の教訓が子どもに根付いていて静かに訓練を実施することができた。避難経路に関しては、段差解消の課題があり、訓練の際には慎重さも求められる。

静岡 静岡市では、耐震や備蓄というハード面は進んでいる。また、市職員と住民による学校が関わらない避難所運営を目指し、教職員は主に学校再開に携わるように考慮している。しかし、地域によっては主体的な避難所運営に対する住民意識に差がある。また、子どもを学校に留め置く時のための食料確保、引き渡し時のマニュアル作成が課題である。

北海道 平成25年度に建替工事の札幌市の学校では、体育館を独立型ではなく、校舎の壁で体育館を囲むようにし、冬でも10℃以下にならない設計にしている。北海道では、冬季の暖房と生活水用のプール水の凍結対策が課題である。備蓄食料は何校かにはあり、緊急時には役所から運ぶ計画であるが検討も必要である。

6 連絡・その他

- (1) 広報部より 入野 広報部長
① 小学校時報購読についての協力依頼
② 教育研究シリーズ購読(49集)についての協力依頼。記念号50集の発刊予定(平成24年4月)についての情報提供
- (2) その他

7 閉会のことば 砂川 副会長